





Handwritten text on a piece of aged, cream-colored paper with a blue grid pattern. The text is written in a cursive script and is oriented vertically. The paper is slightly wrinkled and has some discoloration, particularly along the right edge. The text is written in dark ink or pencil.

17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

炭俵序

朱注 冬の日より春の日いこもりあふのいさこハサる三の
熟し炭俵よあけ上にもあつ猿三のハ炭俵よ
あるこ全体ハ三度ぬしの流行く其つかりつを其てをい炭俵ハよいよ本
あり炭俵仙の翁の生涯のあまぶやこいをぬいもあつはたつを曲夫のこを
いて時々風俵ハものヤうもやうのよまあり。又俗語をたして部のからき
こと炭俵あふこもある

秋集を撰める孤産野坡利牛らハ常ニ芭蕉の軒ニ行

かよハ瓦の窓をひらき心の泉をくみありて朱注 漢相如曰朝
閑瓦窓夕汲心泉

あまうあくの文字のオあまうあつトカあまうあつモ野風を

あましまるる秋この二三子野坡孤産
利牛をさす席子侍り火桶よハ秋

をおこし炭主即翁あつあまよをねとけ口をねとけハいひか
あし口をねとけハいひか宋人

のよ龜下すといへる朱注 莊子曰宋人有善不龜手宋者世々以併游統
為莫容聞之請買此方百金聚族而謀曰我世々為保

のよ龜下すといへる朱注 莊子曰宋人有善不龜手宋者世々以併游統
為莫容聞之請買此方百金聚族而謀曰我世々為保

此の山にありては、まゝのやうに、
前々の旅する人の名堂とものしつゝ、
四の駅より杉風方への言路、
もく、地坂へは、
若堂ともし、

寺つゝ、
町流のつらと、
花の隈
野坡

門を押り、壬生の念佛
芭蕉

前々の花の一字を、
るを以て世俗、
才、
此、
仏あり、
あり、
定、

東風、
全

これ、
ふ、

多、
野坡

是、
る、

江戸の左右むらひの、
芭蕉

爰、
る、

こち、
野坡

方、
芭蕉

こ、
化、
り、
貴、

春の湯治の道すらの川（川）きおの（お）らうし
赤いふをりしてまきまのたま 野坡

とれ家と東の方の窓をあけ 左
前月の地辺の足ほしあれい附月の人家の佛と東の窓に一月の化をこ

魚の喰あ〜とまの雜物 芭蕉
前月の人家あれいこまハ鳥家の用を〜り魚ハ好物をれ〜も奴所〜あれい
魚ハ喰あ〜して地菜の雜物ハ猪ウありよ〜と〜は腹〜も〜あ〜り草〜の〜は〜と〜

千鳥あく〜一ね〜もさ〜あり 野坡
淡と〜一字を執中〜して信〜ま〜ち〜ま〜を〜あ〜て〜

未進のま〜としてぬる古用 芭蕉
前月の〜一ね〜く〜も〜さ〜あり〜は〜た〜して〜未進の首をさつかり〜あ〜れい〜

憐〜もあをひ嫁をつめて 野坡
前月の調子の沈〜ち〜る〜を〜し〜執〜して〜羊〜首〜も〜す〜ま〜あり〜あ〜れい〜は〜は〜は〜嫁〜を〜つ〜れ〜ま〜
こ〜る〜の〜連〜二〜日〜状〜二〜つ〜の〜変〜化〜の〜中〜の〜曲〜節〜を〜し〜各〜残〜の〜花〜を〜川〜上〜に〜あ〜れい〜こ〜ま〜

ハよのつねの附合をもてあ〜の〜ゆ〜ぬ〜を〜魚〜を〜は〜れい〜その〜ま〜を〜ハ〜用〜あり〜と〜あ〜れい〜
一 屏風のかけをたゆる〜わ〜い〜お〜と 芭蕉
是ハその場を〜し〜ん〜と〜て〜あ〜し〜〜あ〜れい〜な〜ま〜

三吟

兼好も遊織〜り花〜が〜

嵐雪

あ〜れい〜隱者の兼好ま〜り〜か〜く〜の〜あ〜し〜〜ん〜や〜人〜素〜餐〜す〜人〜か〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜
る〜あ〜れい〜し〜兼好は兼好の笑の事〜い〜つ〜り〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜
は〜隱者のま〜の上〜も〜う〜世〜の〜ま〜の〜の〜あ〜れい〜ぬ〜を〜し〜あ〜れい〜あ〜れい〜も〜の〜ま〜い〜ん〜し〜と
つ〜ち〜も〜の〜く〜よ〜の〜兼好は兼好の笑の事〜い〜つ〜り〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜
あ〜れい〜れい〜か〜た〜の〜兼好ま〜り〜か〜く〜の〜あ〜し〜〜ん〜や〜人〜素〜餐〜す〜人〜か〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜
もの〜を〜こ〜し〜ら〜い〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜

あ〜れい〜や〜巨〜り〜少〜佳 節もる 利牛

あ〜れい〜の〜所〜も〜あ〜れい〜を〜あ〜れい〜し〜あ〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜は〜と〜い〜ま〜り〜あ〜れい〜
〜〜〜〜〜
七

庭葉あつと知の子屯の卯あつと着身する喜浪雀はさきあり清あれハこれをとて
るふあいふまきさきま白き屯のあれハこれをとて雀すしりハ又五名家の料理子
雀筋よりもの有物を身のまじりあつと供をそへて養ふもてくるも之を託
の屯啄むよりおたるちる多へし和漢三方圖会に曰く根州福嶋小鞠雀雀又宅
吹草子雀鮫ハは軒之腹は食入たるの雀の如くふくろをもてりあつと

片道ハ春の少坂の如くまじりて 野坡

外をぞまじりて 園をよお横場 嵐雪

卯ハ朝日頃の曾の月 利牛

早稲も 畷稲も おもひなる 野坡

前月の用あつとわらきさ旬のあつと

泥濘を長き流るれをすらん 嵐雪

あちこちすれハ夜魚のさきつ 利牛

隣村も 首々嫁を嫁よくる 野坡

ていしくしきもさきちりいまる 嵐雪

前月の嫁儀あつとをいそがしうらとをえて嫁のうらとつけしり又よお抄子嫁
の姑よにくまらしをいそがしうらとをえて隣家のく首々さかこふんとなり
前月の嫁儀あつと行ての歩あつとへしそのいちからうらとつけしりあまの隣の人
んをいそがしうらとをえて隣の畑あつとのうらとつけしりあまの隣の人をいそがし
ていしくしきもさきちりいまるこのまはてりしりハ籠をある籠
ハ草の葉あつとあつと

馬石のちつハ園崎正護院 利牛

前月の地味相の文をわけて附しう黒谷ハ浄土宗西山流の赤山金戒光時寺より

前々を女に見て起情の所ありて前句の一二字をなして附多申一三十一の
三十一ありて一白のちをあらわすをいふ

信都のもろくまの父をやる 芭蕉

さて妹を融けおかしき昔いよ集て寂免さ前伯父の信都へお供のちをやるあり

凡ゆるお供のちの情あり 芭蕉

旅の附多申の信都の園室の柳をみるありてつとみ様よく附多申あり

家のあつても海をみるあり 利牛

肥りた大雨のしるしと晴て柳をみるありてつとみ様よく附多申あり

煎汁をかきおろしをみるあり 芭蕉

前々の家流と海をみるありてつとみ様よく附多申あり

茶の買とみるありてつとみ様よく附多申あり

前々の人祖情起又の情のとるてかくり海くう一句くのもあつき西あり

このまゝいよやう花の聲あり 利牛

と同一みて花見のちをみるありてつとみ様よく附多申あり

よま柳をみるありて 芭蕉

花柳の對句のよま柳とて古本の柳を流る切るを惜

雪のあと吹かかゝる月 孤産

時限の附と前々の柳をみるありてつとみ様よく附多申あり

ふらんたけもれおまじたる 芭蕉

腕力をめきおしつとみ様よく附多申あり

不届ふ附多申の中のまゝあり 芭蕉

けり前々のちをみるありてつとみ様よく附多申あり

むすめおまじつとみ様よく附多申あり

隣の家をみるありてつとみ様よく附多申あり

せりち坊をよ上へあり 利牛

泣事のいそぐま 津波よ 芭蕉

室よかりて泣のこほろしんかこころおのそつち防をたてこころあはれは
かへ作しき位若多うまふまのあまのこころいひそこのまといあはれ
○津波よのふい音便濁の例こよりて半濁よの如く唱言辨

悪玉すももるかねをこぼぬる 孤産

吉凶をつけて金の入るものあはれ今を競向を定め余り化あり

羨のあふすくんて流れに河をかせ 利牛

本質あふすかちさまよふかたの人と所りの人口密の伴あり

定客を送りて提る 獨其 岱水

兵卒の客之前向の人の徳多あふの徳あり

今のふるまの徳のあふすをけいこころ 孤産

故更て客を送り出これ静み降いる徳のあふすは徳いこころ防いぬ

年貢すんたを徳のあふすまふ 芭蕉

雷いふあふすまふまふまふまふまふまふ

息災よ祖父の考ふかめてばよ 岱水

前月のお對つけまふ前月孫つけの祖又あり

想 忍ぶあふぬ七夕の照る 利牛

前月の老人をもの日あかにつけて夜せんとの海あり○月令廣義に父十の室を
りつたあふすまふ天のくまあふすまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
家屋の棚あふすまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
夕もしかくあふすまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
だまよむまふまふ七夕七七日あふすまふ

名力のあふ人合をたる草 烟 芭蕉

俗間今日必草と周子とを食ふ草名あり今の人八月十五夜を以て良
夜とすり誤り書言故更に良夜深更ことありまふまふまふまふまふまふ
す又新月の白樂天の詩は三五夜中新月の色とすまふまふまふまふまふ
まふまふの夜難我あふまふ諸書まふまふまふまふまふまふまふまふまふ

すたのあふまふまふまふ 孤産

これもかえの考まふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ
こまふまふまふの道もまふまふまふまふまふまふまふまふまふまふ

前句を暮秋と見て時節を附くすそウハナリとて又うらな手はあ
五句を吟してらん人

山の根際のはらすらあり 伝水

前句のありぬるをばいさあこしはあ

よこばよそよし 風の吹出に 孤産

山の根際をいさあこしはあ

晒の上よいし 利牛

前句の場をいさあこしはあ

花見も女子をたのしむて 芭蕉

雲雀よりいさあこしはあ

余のくやあしよ 量たんゆ 伝水

なまぬらうおとしきこ。たんの。い。と。海。の。英。こ。

芭蕉 孤産 伝水 各九句

百韻

子を裸父にてきて 早苗舟 利牛

野人の業のいさあこしはあ 下ゆあつて 利牛ハ高貴の人
多てあつていさあこしはあ 合類節用 禪テ、ウ又之下帯。主注杜子美南京久客耕
南敵北望傷神卧北窓看引先書来ハ鮎暗着稚子浴清江俱飛蛺蝶元相逐並帶芙蓉
本自双若飲蔗幾獲所者宜開无謝王為卸又款またのいさあこしはあ 夕影柳の下すこ
前句にて見て女いさあこしはあ

岸のいさあこしはあ 白まてく 野坡

前句の場をいさあこしはあ

雨のりし 珠敷のけ 旭の鳴出で 孤産

場の用之茂の白ういさあこしはあ 雨のあけくらのいさあこしはあ 旭の鳴出でいさあこしはあ

と力町よりむら子 西り勢 利牛

とあつていさあこしはあ けつてあつての後の西んいさあこしはあ 力町よりむら子いさあこしはあ
とて珠敷のけいさあこしはあ 久敷を力町の地をいさあこしはあ 表をいさあこしはあ 上のいさあこしはあ

ふも第のいあくし合くういゆくせんさくせきちたくしあへ

竿竹の茶色油にくりよせ 野坡

今力断とりあふま強の油内多ふとの強油とてあふへし茶色をいふてよく乗たう

馬うとあれてまめく人さ 孤産

やうの油をたくりよまて馬のとあれはち子用心をまて

暮の月干茶の如汁まら 利牛

前々の在休とて附いりくぬの月い志をうぐ。茹汁ヤフけよりつて茹汁あり

茹汁は茹あれとサスといひもれまえの手まけて下の汁あり

掃も流めく檀ちるま 野坡

前々の暮の月い志をうぐの力あれはまの力あをめきかして又月のルしを附

たり他志の心つりいおるまら。檀花多減まゆさしりもいりれ又春曙物も

ちめまきの中よまあれたるは春 孤産

前々の場用や馬の教あらけすりルリアカをまてうぐりも前々のルしは好き

と尼秋人すねや馬をまてうぐりも前々のルしは好きとメキハ舊の明のゆふ少馬を入れて

坊まあまきやま 仁平怡 利牛

前々の少馬をゆふまてこのむくの上うまら余ら他之附肌連の多まて

松坂や矢川よとらうら通 野坡

前々の人の字を附いり心い西上人のまてもてまかりあきものとおまて

雪のまら日いさくく飛あはしりくま坊まあうても俗右の仁平怡といひ

りぬくね坂の矢川をいひりまら。ま注許六南行能に松坂の矢川といふ

い人の面多のらふと馬お先肩よとへ今絶て只のあまうたりとこねふは

吹り 餅もつし 嵐の夜 孤産

前々のつしを心つりいりて打紙の類をのめまへあきまて

十二三年の衣裳のおそろい 利牛

前々を奴隷とて弁官の人の供とてりあ附まや弁の師学は方藏古実とて

辨て政務を司るま附心い言信の人の多の通もつて下郎の前々まは

人を附いりまら。ま注左大弁右大弁左中弁右中弁左少弁右少弁頭弁藏人頭兼

権官以上七弁以外南曹弁といふあり是は春日奥福寺言武峰を司る弁官あり

秋附は南曹兼奥福寺あり詰のよの侍もや

朱まほ小兒の顔よ点す名つけて天点よりよは夜を厭ふまうとあり今亦邦京都
祇園の社頭を老安あり朱まほ以て小兒の顔を笑して梅のまうとありよまうとよま
痘を免るくとり入り天の空をまうとあり

前々の場あり ぼろろ〜あくの腰をこぼる 孤産

前々の場あり 赤い袖をまうて 足するも物思ひ 利牛

前々の場あり 舞羽の糸もまうつり線 野坡

前々の場あり 前々を指さるるまのはち宙の崩れきゆらうとてはまのせんをうつくしう

前々の場あり 浪くよ西國武士のあつとひ 孤産

前々の場あり 尚きのあどろ今日大日 利牛

前々の場あり 切替の喰創〜たる柱にまこ 野坡

前々の時節を前うて大目者の節と場をあらわしたる。まは切替は地中一寸は段て
植まのく和、かき、おしり、喰やて地中よかぬぬる為馬身生に裁てヨトと云

前々の場の白あうまきまの庭前まう〜 孤産

下部の大勢居中より替こものをうつすう一の例もよて下五あ〜まとの
言ふりうよのまはらう〜のまは瘡鬼小不能病巨人故は士瘡を不病昔人
曰君子ハ瘡を不病男人瘡瘡ヲ以奴婢ノ病ト云む瘡ハ足す起る

是ハ瘡病のあ〜まの体といひてまは前々をこまう〜まの 野坡

赤いを下飯のく〜まの体といひてまは前々をこまう〜まの 孤産

赤いを下飯のく〜まの体といひてまは前々をこまう〜まの。まは注出天
の藤の詩に藤花紫蒙草様草青杖杖誰謂好顔色而為害有除中畧又如女婦人綢繆
蓋其夫奇邪壞之室夫惑不能除

とあるまうらうのまき井の志 利牛

前より師とてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
のつたやの事なすつたふ

天満の状を又忘れり

野坡

前よりいそがしき時をえりてとてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

唐の油をよよいしつる 弘の岩

孤産

前より前をよよいしつる候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

むく能くしてまゐる 観音

利牛

舟のものにゆいへまゐるまやうなる

燃志たるを新を虎を拵へて

野坡

前より人伝まよつてもよよいしつる候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

十四五雨のふりまゐる

孤産

前より人伝まよつてもよよいしつる候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

月花よおそあま城の宿をかり

利牛

前より人の観念とつけしつる候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

ても海とあい人こありとてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
ハ所とこねとてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

弦打瓦 海中とち箱 孤産

朱注琵琶山の風を弦おちしとてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
加田より和歌の浦へかけて吹流りして和歌の浦までとまゐる海中言上とてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
かきあけ松と法おと海へと所念をそ前より加田を定まるとてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
いわねの浦にお對の所あり

機嫌社うひこの夜よ能かたり 野坡

かつきする物士のせいしき子菴婦のしそかしきを許てこれ又お對所あり
古言材まかしこりかよこまありの朱注菴に三交休むといふことあり二ハの休
夕午の休り十の休菴めの詞に二ハは休り夕午の起るといふことあり

小豆のころの空を静めて 利牛

そい菴同ふ家の場ありの朱注小豆に巳の刻とてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作
縁つるを腫れちりちりそとあけおして 孤産
前より場とてしつりつけり候つきとて彼外作の事なすつたふの内作

鋳の針を念入りしつる 野坡

なめす年とる裏の堀あひ 利牛

前々のくわらまのりいころ。年注あめすきい治草。何て量長い筑地を
てあたまきこしふ滑滝に被草こころありと

めを結くま理子鳴きを鴉のま 孤産

是は前々の埔の甲あし。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし
けい其鳴きま馬のまろを廻りまあし。おしりとして四のこころあり。これ節目を
めあてつまらちめさのりあり

又たのりい美者たもく 野坡

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

おしりいふは後を申ひて。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

まや子の美のまら。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

入まらくま理子鳴きを鴉のま 孤産

おしりいふは後を申ひて。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

すちらひ子本理子の筑田川 野坡

前々のくわらまのりい女の体とるてこころいその女の姿をつけり。衣敷の
もやうあり筑田川右柳りまを常のまら

は茶やのえゆる岩のあつき 利牛

前々の女の姿を岩川の女と見せしころあり

は茶やのえゆる岩のあつき 利牛

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

あまのえゆる岩のあつき 野坡

前々の春色やい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

花の内は花を花 利牛

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

前々のくわらまのりい。年注一説あしりの為子鴉を鳴きり。本多もあし

賞

賞子ぬく息は朝が嵐雪

賞子ぬく息は朝が嵐雪

賞子ぬく息は朝が嵐雪

賞子の文 具角

賞子の文 具角

賞子の文 具角

賞子の文 具角

賞子の文 具角

柳

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

柳 湖春

めづるや内へ花見をさつめし **杉風**

上野花見の事などこれをもとのまゝにいひつゝ花見の事などいふは花をさつめするの事なり

こびつゝまゝ花見の事など **丈艸**

丈艸の事我々の事なり

何れしれかりの殿の花見をさつめして

中下とそめお花見の事など **素龍**

花見の事我々の事なり

花守や白きうらを突あけ **去来**

花守の事我々の事なり

朝めの湯を片膝や庭の花 **孤屋**

花守の心を奪はしむる事なり

あまたと云ん花見の中 **北刑口**

あすは花見の事なり

たのしみもそのこゝし **斜嶺**

花見の大勢の事なり

柳の加衣御衣申す **北枝**

肉團の事なり

牡丹すくくもや **湖春**

大和の事なり

あたふと花よ **其角**

花見の事なり

花はもを中りあかし家極 嵐電
極はもを中りあかし家極 嵐電
あかし家極 嵐電

やまてらつちるや小川のあま車 智月

山てらつちるや小川のあま車 智月
あま車 智月

老僧もか衣ぬ衣うつさる花を花 之道

老僧もか衣ぬ衣うつさる花を花 之道
あま車 智月

誰もそ花を降敷くささる極 祐甫

誰もそ花を降敷くささる極 祐甫
あま車 智月

山極小川花これささるあま車 普全

花見つらひ水こころ目ももささる

昆布節や花を元つく庫裏坊主 利牛

昆布節や花を元つく庫裏坊主 利牛
あま車 智月

おちつさる海やまかまや極所 全

おちつさる海やまかまや極所 全
あま車 智月

おちつさる極さるや 皇極 孤産

おちつさる極さるや 皇極 孤産
あま車 智月

父あまてあそありおちて花見が 野坡

父あまてあそありおちて花見が 野坡
あま車 智月

食の村これあつまるや山極 全

食の村これあつまるや山極 全
あま車 智月

上巴

四方より花のうき入るて鳩の梅
 湖や心もしくりて 四方の花
 かいそんの来るらん花のあはれ
 海より家屏辺の花のあはれ
 ちる花を海解まかへく若る
 芭蕉
 北枝
 楚衛
 山路
 え之

右

夏之部發句

首夏

塩うをの裏はもろく衣うへ 嵐雪

人の衣うへをよりにて塩うの裏を干して蒸気をとらうと一帯一時首夏のあるあはれ
 し衣うをよりにて塩うの裏を干して蒸気をとらうと一帯一時首夏のあるあはれ

衣う十りもやくは花がけり 野坡

衣う十りもやくは花がけり 野坡
 衣う十りもやくは花がけり 野坡
 衣う十りもやくは花がけり 野坡

綿をぬく旅ねはさく衣う 九節

綿をぬく旅ねはさく衣う 九節
 綿をぬく旅ねはさく衣う 九節
 綿をぬく旅ねはさく衣う 九節

雀よりやまき改めや衣更 雪せえ

雀よりやまき改めや衣更 雪せえ
 雀よりやまき改めや衣更 雪せえ
 雀よりやまき改めや衣更 雪せえ

花のあはれはよぬもの 子冊

花のあはれはよぬもの 子冊
 花のあはれはよぬもの 子冊
 花のあはれはよぬもの 子冊

扇やの暖く廉白く衣う 利牛

扇やの暖く廉白く衣う 利牛
 扇やの暖く廉白く衣う 利牛
 扇やの暖く廉白く衣う 利牛

秋之部

名月

秋のありぬりまのくの中よ
月を敬て時候の序をあらはれ

名月や見つめても居ぬ夜よき 湖春

月見くはハソと金足つめてあるあはれ清光のまよひ吐して静ま今
月流をあらとて信をまののちはどやとま

名月や縁とりまいた赤の虚 去来

名月のまよひを對して赤の虚の地早あるをよむたるい縁向うて力をかり
十や八月の月がけあるちししころのそつりしんとりあて不ころり三経もま
りぬ見識のまよひがまよへ

家買てこそし見初る月夜也 荷兮

年く二月の月見れとも我病あふ月を足ても足さる地しころよこしこ
我宿つてゆつころ月をえちとま

名月や誰吹起す森林の旭 洒堂

誰り吹おこしんりや吹起さるともこの名月のまよひは旭さくあこのあま

あこぬまろへ

松陰や生ぬ揚る月の月見 里東

生ぬ揚る波舟をりるあまろへ月をこに上の月をうちあらねれねのけり
とも船をりるあまろへ一人の月見ものあまろへ揚の字大女は揚げあま

もち段の橋のいくより月の月 利牛

もち段の十五夜の月こちて橋折る月のさしかるるまよひあまろへ
くさよとゆさし

家こるのあまもさし後の月 其角

月さし後の月こるあまろへありぬりまよひあまろへ家こるあまろへ
まそまよひあまろへ

むさしの子秋の月もあま見ける

望峯の不盡筑波を

明月や不こるゆりとする所 素龍

前書よるまよひあまろへまよひあまろへまよひあまろへ
四十二 富士、不夫、富茲、富二、婦冬

このてーのふいたーのあまて秋ふきかたなりあれお別息の花を柳のえとよ
ほをこしつてさうしてさうある人右の仙の説もつとさう然後拾遺集を
下あり香を核の花よりぬいてして柳の枝よりきこしけさく討をさる
ある人しゝる注こしつて誤こしつてお説あり又さうあるてー文字の柳字
こしつてお説さう非あり又豊州の葭林あるてさうあるてさうあるてこ
何丸く注さうあるてさうあるて

秋虫

年よれいさるにかりそえきりしに 智月

まろりしすも多秋のあつてさうあれぬくさうある人さあれぬ我こしつてさうあ
とあるさああるてこのそい注いさうあつてさうあ

悔ふ人のとまぬやまらくさ 文州

喪中のあつてさうあ

中宵もくんでさうなるぬかこび 為有

ぬうこい非情のさうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあ
つてさうあつてさうあ

こらるまやあつてさうあつてさうあ 孤産

田家もあれ旅中さうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあ
月令章句曰蟋蟀虫名俗謂之蜻蛉トイハレ又古詩蟋蟀吟蜻蛉と通りて常さい
へりあつてさうあ蜻蛉と蟋蟀は口物ある蜻蛉は古保呂木とありさうあつてさうあ
り蟋蟀はこらるまのさうあつてさうあ

麻

友麻の啼をえらるるわいさ 東来

ふあるさ麻の啼をえらるるわいさ

人のもともあまよりして

麻のさむ海や硯の新雁形 素龍

此夕硯の滑さやあれん麻のさむあまやのやうにけがれを丸尻さうあつてさうあ
糸注すりお海のしらのさあまよぬさうあつてさうあつてさうあつてさうあ
也さうあつてさうあ

旅りのさき

近江海やすらひさる麻の長 土芳

旅行のさき近江海のさうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあつてさうあ
若つさうあつてさうあ

冬枯の穢の何もあまよひの目をつけて鶴の人家に住むものあるのか
何もあまよひの目をつけて鶴の人家に住むものあるのか
度利伝加能利又延喜民部式交易雜鳥塚苔五介云々

櫻木や菰浪まりた冬かまくら 支梁

物の菓のきれ行冬や小松原 斜嶺

外巻麦の跡のむかしむ雀のふ 桐実

風の萩よりくるある少家が 残香

初めおや猫の毛をき 楚舟

月あや 志けき猫の面 八段木

おのれは内侍をいふは他志のそとにき猫の顔向あり

南宮山は詰り

木枯の根をきり身枯也 桃隣

年深なる宮庭の神はあまよひの目をつけて鶴の人家に住むものあるのか
日陰府中は冬後又郎南中山は冬なるおは南宮山は美濃の國不破郡神社
洛に入ら竹杖杖を杖てて頭を打ちや 俗に南宮山と云ふ冬神は金
山と云ふ命あり又伊賀の國は南宮山あり 一曰作あり 桃隣りちまよひあり
美の二の宮をてを竹杖杖と云ふと口をの垂れしは美の三の宮なり

笠巾月よおの獲鉄のたむさび 漆刀

時雨

芋喰の腰はしりしり 初時雨 荊江

黒いんく 沖のめあ の行とろ 文草

芭蕉翁を我茅屋にまねきて

もらぬらるるふりぬるよ州の産 斜顔

年注撰集抄：西行上人江口の里を遊行のいふまじくこれのそとくして人の
かみまやまふし内のうごき見りしむあま主の虎あぐれのもりらるるをよひて
板一枚さけてそりりりりれハ西上人「志つゝのふきやをよまきまらつて
彼虎さうあへん」月にもれあはとるれあまいと付侍り上人おめそし
その夜一宿しては終りむらむら

在明とあれいなくしくも許六

しくれのもり群うらるものさるまよりそち終の頃ハ月うそへゆきと

旅 旅のころり

小坂を流とらうりの印ハ挽やぬ 野坡

旅者のさしいさありれふりし〇せ元和名抄にこくしとあり〇年注故事都人
有吹笛者葦声嘹亮又支本集顯照法師「ひさしり旅をいまハ何とあふさ
まん」とあつての笛も吹やまらるし

大根引とらふ中を

靴 土着の少坊主をうや大根引 芭蕉

由はうつゝそを白ことほの仰きれしむあつことまきすうた

鉢巻をとれり若流そ大根引 野坡

大根いまのあはれもあつたあつしこの鉢巻をとれハこそは談笑の心見をいさめり

神送つ 羨あり宵の土大根 洒堂

神送つハ九月三日之是日類子すくしぬ一掃あり十ヶ坊の處ハ善秋のまこととそ
土大根よまをそくたうしてあれはち土大根いゝのしこらる

たむさき 下の五みまよすあて

人々の夜中をさるるたむさき 野坡

さきおふけて人声のまらたまたたののあつ常のまらつゝと感ありあたり
のちさしこらるへ

この頃ハ先挨拶もたむさき 尔蜂

ものこら入らむしすくして鉢巻のまらつて金持をさるるあつ

苔ま切り吸物もあつたむさき 利牛

名ウ

小栗よりむ片言ませて衣あり

其角

前より実家の体と見てその笑をいもすはあはくのをききまありのむらあえし
そこそ前よりあはれぬこの年注小栗よりむ片言の物ありものあり又片言
とい文字を暗くさるるいふ又か兒のものいふもいふ

きよたらつく浮舟のふね

孤産

前より日知侍の舟よりあはれつゆいよあはれものいよあはれをさてさへはつる舟
ハ折るるべし。年注浮舟といひ明りいふをいふさんとすれどもその日よあはれ
風のよかきさぬいよあはれにぬをいふを流るるをいふ

孤産の旅立事出来て洛へのむらあえし

今四の末満よりして吟終りぬ

其角 孤産 各十六句

天野氏真行

道くらう檢いあつめて安き山子

桃隣

今日は内へまいるなすうらぬせり流るるして安き山ありまは双の指を穿
りたりかきしを思捨てあつめつたそこてわしうたまは是に古切を穿しるも
のいやはといふをいふしうらぬあつめてせめてりかきし心の心をあはれんと
おもつていふ

とんともぬのり流るる秋風

野坡

招ハその場の空をいふはきりて豊年の秋を流るる

入 かなは秋なるのうらむ明て

利牛

時分の所あり前よりいふはきりて豊年の秋を流るる

堀の外きて桐のひろがる

桃隣

前より堀に大家の家居のよきををなほよあはれいふ

銅土垂よりあはれぬるくんとつらき

野坡

前より桐の本井のゆるうらむをいふはきりて豊年の秋を流るる

つよあ降るるあつめつていふ

利牛

あんなに思ふものもあつたの——と 晴秋の空のあはれと 法も夏もあつたもの
あんなに思ふものもあつたの——と

もみややふも十五日あり 利牛

前々の人の親志より前々の日の俗物より後をわけて置いとく
ずい平の核の火種はとうとて 桃隣

職人の日あしをきくも何の前々のさう款しつゝあはれかきつゝやすむいま
あはれともはやふれも半ばあつたぬ火種をとうとておくと一月日のまを接をく
るらういふたるとあはれより平のさう款しつゝあはれかきつゝやすむいま

むいこのいんたれとえは 野坡

買ひた米をみずみずしく 利牛

前々の人より思ふもの者往人多く入し其人のうらを許しつゝ
帰るるときこの世にさうとつゝ 桃隣

是に前々の人より思ふもの者往人多く入し其人のうらを許しつゝ
帰るるときこの世にさうとつゝのわかれもあつたて一々のうち

け交の甘味いきし秋の毛路 野坡

是に前々の人より思ふもの者往人多く入し其人のうらを許しつゝ
帰るるときこの世にさうとつゝのわかれもあつたて一々のうち

杉の本末より月うらむ 利牛

秋のつゆとくしつゝあはれもあつた月の日さやうあつた秋の夜杉の子よあつたつゝ
はさうちあつたつゝあはれもあつた月の日さやうあつた秋の夜杉の子よあつたつゝ

同士の老の塚のあつて 桃隣

前々の人より思ふもの者往人多く入し其人のうらを許しつゝ
帰るるときこの世にさうとつゝのわかれもあつたて一々のうち

あまやうらむ又サ新部を待 野坡

いさうなる人より思ふもの者往人多く入し其人のうらを許しつゝ
帰るるときこの世にさうとつゝのわかれもあつたて一々のうち

よらむ我のよとをよむる 利牛

此は身より思ひす津の世にのしりあへりついで馬をもちて此日
直をよき事と云ふんと云ふれあはれあはれし事を思ひ言ひ自らが死て成済の故を
もてその世に渡り及の世と云ふ事あり世を觀むと云ふ事ありやすしと云
りこゝ即奥のぬきと云ふ

降こいやすき時ある也 野坡

眼の時常をさしあがり下心に富貴の筆頭をえ取つていさを入る
のこの多の禮をさしあがり下心に富貴の筆頭をえ取つていさを入る

番匠の櫻の小いれをいりて 孤産

突りあはれおのの世をあれり殊も目さへこゝかめて番匠のついでに
櫻の葉一亦も櫻の葉あり又大がよの櫻の字あり

片をけ山より月を見らば 利牛

古今抄よりあつきの俳句の詞より大工とも本挽ともいそんよこの番匠を云
詞の堂上と見て和奇の柏子ついでに上を以上語に但番匠より詞の万葉体
の奇ありと云ふ事ありあはれりやいそんよかきさしあがりついでに
のしりあへりついでについでに

好物の味を絶さぬ秋の風 野坡

前月のすうりて月を味くすて附て在家の影味をえきこ

割本の安き國の露雨 芭蕉

前月のすうりて月を味くすて附て在家の影味をえきこ
又き割のすうりてありの本注割本の安き國の露雨の事

網の者をいりて舟をいりて 利牛

前月の山野の人附りて海辺の人ありはぬいりて舟をいりて舟をいりて
も海辺もさるる世ありはぬいりて舟をいりて舟をいりて
のより船のもののかし声あり舟の通船のをつきの船あり故網のものより
たのむ事あり

星さへ見へは二十八日 孤産

前月のすうりて月を味くすて附て在家の影味をえきこ
人ありと云ふ事ありはぬいりて舟をいりて舟をいりて
目さへ見へは二十八日

いぢる事ハ殊も軍の大事に 芭蕉

前月の暗夜をいりてあがりてあがりてあがりてあがりてあがりてあがりて
食ふ事ありと云ふ事ありはぬいりて舟をいりて舟をいりて

附江二次の他者又その心を得て踏の森の窟と定めしり本願寺の軍も大坂三河
とく二かたに流路の風を三々よましくしてそのものすすむをあらういしるハ
二十八日のあを神ひてあまねと神を附さきさき多う淡念の窟のあはすんハ何れの軍
とてさしこくへし又二十八日、軍ハ不二の持持しして吾我兄弟の討の伴といはるハ
附てさしこくさきさき二十八日花の浪牛登人といふれとやし是と一向宗の信あり
りかすもりあり

淡念の窟子 雑談もまぬ 野坡

軍の天よりふとあまのあてき目のさかぬ窟の自を丸ハ敵の奇計とやあはん
とあそひのさきこいしとて前よりあまのさきこいし

明あまむ龍桃灯を吹んしとて 孤産

前日の供廻しを附くるこいしとてあまのさきこいしとてその境界をんをさきこいしとて
瘰癧よ漲る 湯屋の宮ササ 利牛

上を平一の干系刻ももうハのせい 野坡

是も前日の人かたさきさき前日の男子のすうたあり附くハ下女のすうこいしとて
大家の請もあまのさきこいしとて計のしかけさきものありとてあまのさきこいしとて

馬よまぬ日ハ内へ哀する 芭蕉

哀も其かまけりしとて下女ハ馬つらひのすうこいしとて

紮賣の七つとかりを音つれて 利牛

前日の娘をえこいしとてこのを愛さきさきとてさし合ドヤとて

堀子川ある五十五石 孤産

約うり水場を侍所と附くるこいしとて未注紀の母之の伴ハ非こと

け鳴の蹴鬼もよを摺月と花 芭蕉

前日をあまの窟の鳴守との勤音所あまの目見て其人の仁徳を賞して蹴鬼のこいしとて
人情も法化して月花の如くめてさきさきとて

砂子暗このうつろき草 野坡

前日を春さきさきけて鳥さきさき砂道を附てさきさきをまをねらるあり

新島の香昔もあつと雪の上 孤産

前日を春さきさきとてぬくさきさきとて仙もつとて

吹とさきさきなる竹さきとて行 利牛

海濱の曠々として大石の行列をもちけおしたる姿に。あいたにアヒダに万能

牙はあはる風もふりく月夜桃隣

前日の時分を附く五七の風情をあはらし下五のルキ

粟をわらしてしらき富地利牛

是は前日の場ちりりまかしくなる女あ

熊谷の堤さくぬく秋のあ伝水

是は前日の見えししのルキも熊谷の中仙道より三里をり土よをあらぬ

築こしらへて野原を渡る野坡

前日の場ちりりまかしく見はるる

二三日を床所もろふ門の服子珊

前日を商人と見て出逢見せり小居あとの趣を附く

馬の荷物のかかる干も枝估圃

前日の場の用にとり附肌は淡白なるを説きとす

竹の皮雪踏を登へる夏のまて石葉

干物をいしそのまをてて夏のまをて附く

稲あまのさるあ杉風

時假は時假の附くあり一舟の波す稲の雲にま前の地を次つてけり

白前者の一人も見てぬ浦の秋野坡

白前者のまをてこの人としつてこれに前日を山地をてけつてけり

めつる風のそやるか白過利合

前日の一人もてぬまをてけり

宵の月をかくる旅た工依々

前日をとりめて客中のありぬをそへしつて土の大地を心あはれと志し

岩牛へはむる鬼をかひゆ桃隣

我も内まこぬるの子はもろを思ひ合をてけり

茶むしらのまいつくよ花ちりて 子珊

川柳すすく子少鮎いふさる 石葉

軽くうしそぬてまほまき 雉子の夢 杉風

岩へ入れり山 行なう 心水

おおい多おれしと親わたり 孤屋

あはれめてハおのき 精進日 曾良

降身を極めて 遠へをかり 桃隣

前月の家の用之精進日のまきよりいふ子前月を徳者ありて見し施行のこまぬ
まとの用をとりけり

前月の人を見りてまきある在人と見て其味生いさ年代の礼をもちあり 依々

雪舟にあくばと自修をすちいし 沾圃

とあく行て火をとるとまる 子珊

又けさも仏の食を地を明 利牛

損を所しそ賢ころぬ之 杉風

大坂の人よすぬころる冬の月 利合

金念匠者として其境界をとりけり

是も前月の位ありてまきの人をもちあり

世子合ぬ商人ありてし中書ありてし其執事ありてし其人ありてし

青柳の路傍をまゝあつたつひ
 川越しと帯しきよなる柳の家
 泥塵子人たつりちる柳のうら
 青柳とともようこやをうけ元
 青柳の吹出せぬくおの胡蘆
 このあゝる風よこぬやいもほら
 草先や追鳥狩のむすうまふ
 るまの下くくり行柳の家

嵐竹
 心水
 可長
 史邦
 去来
 白良
 史邦
 里倫

芳野

花がかり山の日ころの鈴なけ
 芭蕉

換りて合いこもさう花をり
 花雪とちしや銭のあぬ山
 近道や木の股通る花けり
 景清も花見のゆゑは七兵衛
 数え陽子衛門様の花見えが

山店
 去来
 涸水
 芭蕉
 山店

三月畫

赤猫のうらさくさあぬまのとき
 新宿のまふ穂かつくまのとき
 水風鳥のまふあゝ春のとき

山店
 史邦
 嵐竹

右

撰者芭蕉門人

志太氏

小泉氏

野坡

池田氏

孤産

利牛

元禄七歲次甲戌六月廿八日

殊十二字大亦ニアリ

